病気のお話

知っておきたい肺がんのこと
～手術療法～

呼吸器外科　藤永一弥

肺がんは治りにくいがんの一つだといわれています。２０１０年の人口動態統計によると日本でがんによって亡くなる方は年間約35万人ですが、肺がんはその中でも7万人と最も多く、１９９０年後半以降がん死亡率で第1位となっています。しかし医学の進歩に伴い肺がん治療の選択肢は非常に多様化しており、より良い状態で長く生きることが可能となってきています。

肺がんの治療方法には、手術療法、放射線治療、薬物療法（化学療法）があります。単独で行われることもあれば二つ以上を組み合わせて行うこともあります。

今回は私たち呼吸器外科が担当する手術療法についてお話いたします。

●手術を選択する場合

肺がんは大きく非小細胞がんと小細胞がんに分けられますが、通常手術の対象となるのは非小細胞がんです。腺がんや扁平上皮がんなどがこれに含まれます。

手術では、体内のがんをすべて切除し取り除くこと（根治）が可能ですが、がんが限られた範囲に留まっていること（ステージⅠ～Ⅱ期とⅢ期の一部）、全身状態が手術に耐えられること、術後の呼吸機能が保たれることが手術の条件となります。実際には肺がんになった方の約4割が手術を受けられています。

●手術の実際

手術は全身麻酔で行われます。従来より胸部を10～20㎝程度切開する開胸という方法が用いられています。肺は右が3つ、左が2つの肺葉に分かれておりますが、手術の基本は、がんのある肺葉を切除することと、がん細胞の通り道であるリンパ節を切除（リンパ節郭清）することです。がんの状態によっては片肺すべてを切除する場合もあります。手術前に肺がんの診断がついていない場合、肺を部分的に切除し、術中にがんかどうか検査し、がんであればそのまま引き続いて肺葉切除を行います。肺葉切除の場合手術時間は3時間前後です。術後約5日間は胸の中に貯まる血液や空気を体外に出す目的で、ドレーンという管が挿入されています。通常手術翌日より食事や歩行が可能となり、1～2週間で退院可能となります。術後もスポーツや趣味を楽しんでおられる方も多くみえます。手術後の合併症には肺炎、不整脈、膿胸、呼吸不全などがあり、手術により命に関わる危険性は0・5～1％とされています。

●体に優しい手術をめざして

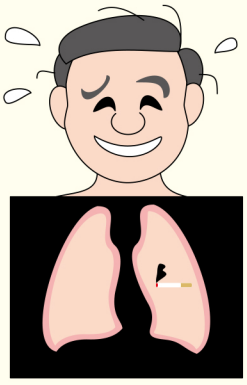
手術後は、多かれ少なかれ傷の痛みや呼吸機能の低下など手術による弊害が見られます。それらを防ぐべく近年体に優しい手術への取り組みが行われています。

一つは胸腔鏡下手術と呼ばれるカメラを使用した手術で、3㎝程度の傷1カ所と2～3カ所の小さな穴を用いて手術を行います。従来の開胸手術に比べて傷の痛みや体力的な負担も少ない手術です。

もう一つは区域切除と呼ばれる手術です。肺葉はいくつかの区域に分かれますが、がんのある区域を切除することで、肺葉切除に比べ切除範囲を小さくし呼吸機能の低下を少なくすることが可能です。通常2㎝以下の小さな肺がんが対象となります。

当然これらの手術も根治性や安全性が損なわれないことが必要です。

●もっとも大事なこと

肺がんの治療は日進月歩であり、手術を含めた治療成績も向上しております。ロボットを用いた手術も国内ではすでに始まっています。しかしもっとも大事なことは、早期に発見すること、そして何よりも予防することです。

定期的に健診をうけること、そして予防には禁煙が重要です。肺がん検診や禁煙外来などを積極的に活用しましょう。